美術用語のシソーラス：複合名詞を中心に

辻　宏子

Vocabulaire spécialisé dans les revues des beaux-arts - autour des noms composés -

TSUJI Hiroko

Nous nous proposons d'analyser le vocabulaire spécialisé utilisé dans les revues japonaises des beaux-arts destinées au grand public. Le vocabulaire des beaux-arts en usage aujourd'hui repose essentiellement sur la traduction de concepts occidentaux réalisé à l'ère Meiji. Mais il continue à s'accroître de nos jours, dans la mesure où les informations artistique en provenance de l'étranger arrivent au Japon en temps réel, et où une partie de ces informations introduisent un vocabulaire nouveau, concernant les tendances, les techniques ou l'esthétique, qui doit être traduit aussitôt pour sa diffusion sur place.

Il se trouve que la plupart des vocables des beaux-arts sont des mots composés. En fait, dans le lexique japonais même, le nombre des mots composés est supérieur à celui des mots simples. Nous nous demanderont quelles ont été les méthodes suivies pour exprimer les concepts occidentaux à l'aide des caractères sino-japonais en usage au Japon. Etant donné que la fréquence et la productivité varient, les néologismes de ce type se révèlent complexes dans leur interprétation. En examinant cette question, nous envisagerons la problématique de la traduction conceptuelle liée au système des caractères sino-japonais et à celui des *katakana*, afin de relever leur corrélation sémantique.

A travers divers phénomènes langagiers, nous avons fait apparaître que les vocabulaires spécialisés des beaux-arts en *kango* et en *katakana* ont un point commun : les uns comme les autres présentent une structure incohérente de mots composés.

0. はじめに

小論は一般向けに発売されている美術雑誌において使われる美術専門用語について考察したものである。資料として、月刊雑誌「美術手帖」（美術出版社）１997年１月号から1998年１月号の１年間のバックナンバーを用いて調査した。

現在、日本語語彙として用いられる美術専門用語のほとんどは、鎖国が解けた明治期に西洋から大量に流入した概念が翻訳されることによって一挙に増加した。（「美術」という言葉も1873年ウィーン万博に出品する出展者に対しての出品規定書にドイツ語のKunstgewerbeを訳出する際に造語された。）その後も西欧で成し遂げられる美術の主義主張・動向や作品の情報などがリアルタイムで日本に伝わり、それを新たに日本語化しているという状態が続いている。

従来、語種構成を考える場合、和語、漢語、外来語、混種語の４つに分類されることが多い。外来語とは「外国語から入ってきて、その国の言葉のように用いられる語。日本語の場合、古くから伝わった漢語は外来語とは呼ばれない。」（岩波国語辞典第４版）とあるとおり、日本語の語彙について議論するとき、一般に漢語と外来語は区別して議論されてきた。しかしもともと外国語であって、それが日本語のなかに入って日本語化したものだという見方をすれば、漢語と外来語はむしろ同類であろう。全体としてみれば漢語は歴史が古く、外来語は歴史が浅いという相違はあるが、部分的にみればある種の外来語よりも新しい漢語があり、比較的最近になって造語された新しい漢語よりもずっと古い外来語があることもまた事実である。したがってむしろ外来語と漢語とをまとめて同じ種類のものとみなし、そこにある種の同質性をみるべきなのではないだろうか。そればかりか、西洋の言葉が日本語として取り入れられるときに、中国の言葉を日本語化した漢語のプロセスがおおいに下敷きになっていることが予想される。

1．美術専門用語の一般的性格

調査によって抽出された1598語の美術専門用語を語種の割合で置き換えると、和語２％、漢語52％、カタカナ語35％、混成語10％、アルファベットは１％という結果を得た。

和語は、日本の伝統的手工芸の伝統を引き継いだ版画や陶芸における技法に関する言葉にみられる。アルファベットでの表現は、MOMA (Museum of modern art)や、CD－ROM、３Ｄのように西欧語の頭文字からなる略語で、現地でも使用されているものなどをそのまま踏襲する例が多い。

カタカナで表記される外来語に関しては35％という結果が出たが、これを他ジャンルの専門語における外来語占有割合と較べてみたい。石野博史（1983）は、自由国民社編「現代用語の基礎知識」を利用して専門別各分野の外来語含有率を調べている。ファッションのジャンルでは97％、美容と食生活の分野では80％以上が外来語である。少ない方をみてみると、歴史17％、哲学23％、生物学30％とあり、調査結果をみる限り、若者を中心に大衆化した分野ではかなり外来語が使われており、逆により学術的で専門的なジャンルになると依然として漢語が使われる機会が多いということになるだろう。小宮千鶴子（1995）の調査した経済専門用語の語種割合では外来語は４％であり、それほど多いとはいいがたい。

今回の調査結果の35％という数字はそれなりに高い割合でカタカナ語が使用されているということを示すであろう。

もう一つの特徴は、複数の構成要素からなる複合語であることが多いことである。今回調査した８３０語の漢語のうち、55％にあたる４５６語が複合語であった。混成語も、先に触れたとおりすべてに漢語の語基があることからも、美術専門用語を構成する漢語の割合はかなり高いことが分かる。

見坊豪毅（1964）は、日本語の語彙において複合語は68、000語あると報告している。これに対する単純語（複合語でない漢語語彙）は40、000語であるので、一般的日本語の語彙というのは、単純語より複合語のほうが多いわけである。

混成語を構成する漢語以外の語基の語種はカタカナで、他のカタカナや漢語の語彙と結合して複合語を作る要素がある。以上から分かることは、

１）美術専門用語はカタカナ表記される割合が高い。

２）漢語種も外来語種も複数の構成要素からなる複合語が多い。

３）複合語の構成要素の主体となるのは漢語である。

４）カタカナ表記も構成要素として漢語に次いで多い。

５）漢語は特に造語力が豊かで、美術専門用語の形成にあたって中心的な役割を果たしている。一方、カタカナ表記語は語基のバラエティは豊富であるが、広い分野にわたって造語成分として働く力は必ずしも強くない。

2-１．複合漢語の形態的問題

美術専門用語は日本人によって新しく造語された漢語といっても過言ではない。日本人が新語を作成する場合になす事は、そのものの特徴を考え、それを言葉で言い表すことであるが、多くの日本人は和語を手がかりとして考え、それをまず和語で言い表してみるに違いない。次に漢字をあて、それを音読みする。音読みをしていても日本人の意識のなかには和語である訓が意識されている。このように訓を持っている漢字、つまり日本人にとって意味をすでに知っている漢字をを取り出して組み合わせながら、原語の意味に近い言葉を造語している。

今回の調査の結果、美術専門用語の漢語において、頻出する語基は以下の通りである：

美、画、作、派、的、形、性、展、面、家、法、術、学、者、線、表

2-2. 複合語彙の構文論的問題

文字形態の次に、こうした意味の点から選択された漢字がそれぞれどのような関係で構成されているかという問題に触れなければならないであろう。

単純語はその語形の短さ、構造の単純さからして言語的伝達をきわめて能率的にする。従ってある言語社会が有する概念のなかでよう頻度の高いもの、意味のより抽象的な概念は単純語で表現されてきた。それ以外の、単純語による表現を持たない概念が句とか文とかの形式で表現されることになる。ところが現代の言語社会では次々に新しい重要な概念が生じてくる。この需要に対して単純語はきわめて保守的であって、その数を増やそうとしない。我々にとっても新しい単純語を覚えるのは容易ではないし、かといって文レベルの表現に頼っていたのでは、伝達が非能率である。

複合語はこのような需要に応えて、文レベルと単純語レベルとの中間に位置している。すなわち複合語は、２つあるいはそれ以上の単純語を結合して新たな表現をつくっているのである。ところが、複合語の意味を解釈する場合、その基底にある構文論的構造による意味解釈が、そのまま適用できるものと、そうでないものとがある。

美術専門用語の場合も、たとえば「農民芸術」というジャンル名も、もし内容を知らない人がこれを聞いたときには、「農民が制作する芸術」なのか「農民をテーマにした芸術」なのかは判断がつきがたい。

a)「ルーブル美術館」b)「印象派美術館」c)「庭園美術館」はいずれも「名詞＋美術館」という同じ形態の複合語だが、a)「ルーブルという名前の美術館」、b)は「印象派の作品を集めた美術館」、c)は「庭園で作品を鑑賞する美術館」と、前半の名詞が後半の美術館という語に係る修飾の仕方が異なっている。

このように表層構造としての複合語のあいまいさが、シンタックスの構造の違いによって説明できるということは、複合語が構文論と深くかかわっている証拠である。

その他、漢語と漢語の組み合わせに関しての例をあげたい。

e)金属彫刻、ブロンズ彫刻・・・金属（ブロンズ）で作られた彫刻

f)音響彫刻・・・音を出す彫刻

g)庭園彫刻、野外彫刻・・・庭園（野外）に設置された彫刻

h)ルネッサンス彫刻・・・ルネッサンス時代に作られた彫刻

形態的には名詞を二つ重ねただけだが、文章にしてみるとそれぞれ違う構文を持っており、e)は彫刻作品の素材、f)は彫刻作品の付加された特徴、g）は作品の設置される場所、h）は作品が作られた時代、についてさらに詳しく言及するという結果となっている。

「芸術」という語も造語力の豊かな言葉で、多くの複合語が生まれている。

前衛芸術（前衛的な芸術）/ 複製芸術（複製技術による芸術）/ 農民芸術（農民およびその周辺事項をテーマにした芸術）/ 二十世紀芸術（２０世紀に生まれた芸術）/ 芸術擁護形式（芸術を擁護する形式）/ 芸術至上主義（芸術が至上であるという主義）/ 視覚芸術探究グループ（固有名詞：視覚的な芸術の可能性を探究するグループ）

シンタックスを無視した造語漢語は、原語を直訳して順番に並置させたと思わせるものが多い。一方もっと遡った時代に入ってきた美術関係の用語は、類義語を結合させることで従来の漢字の意味と西欧の概念との整合性を慎重にはかっているものが多い。例としては「絵画」「風景」「陰影」「表現」「装飾」「彫刻」などが挙げられる。

3. カタカナ語の語構成

次に日本で作られたカタカナの造語のうち、もとの長い原語を省略しながら造語するパターンをとりあげる。日本人にとっては手頃な２音節に省略される場合が多い。

i)ネガ・プリント（まず、写真画像作成の際のフィルムにあたるネガティヴ・フィルムを省略し、写真の技法であるプリンティングをプリントと省略して組み合わせた。）

j)ネコ・プリント（New Enlarging Color Operationの４つの頭文字をとってローマ字読みし、後半のプリントの部分はprintingを略したもの。）

k)フォト（写真Photographの省略）：フォト・モンタージュ、ルポルタージュ・フォトなど。意味はそれぞれ「写真を素材にしたモンタージュ」「ルポルタージュによって撮られた写真」となる。

漢語の語彙で見てきたように、複合語になると形態的に二つの語彙を並べているだけで、複雑な修飾関係はなかなかつかみづらいということが、カタカナ語にも起きていることが分かる。

しかしともかく、カタカナ語は単なる借用語として、現代語彙のなかに加わるだけでなく、造語能力を持つものとして、漢語に続く存在になりつつあることを意味しているようだ。

4. 結論

美術専門用語は漢語で表記されるものも、カタカナで表記されるものも、ともに新しい事物・概念・考え方の日本語への翻訳である点は共通している。複合語になった場合の修飾語の構文がバラバラで、それが原因で意味が曖昧になったり、意味のずれが生じてしまうことも双方に共通してみられる現象であった。

しかし双方の違いも認められる。漢語は、日本人にとって意味の明らかな漢字を慎重にはかりながら造語されているため、たとえはじめて目にする用語であってもどのような意味かを想像することができる。しかし裏を返せば、書き言葉以外には使いづらいであろう。音声言語に頼るテレビやラジオなどの放送では、漢語の多用は理解の障害となりやすい。話し言葉における美術用語にどのような特徴や制約があるのかということも調べる必要が出てくるであろう。現代日本語は書き言葉で漢語が多く、話し言葉で和語が多いという一般的な傾向があるが、美術専門用語の場合も、テレビなどでは和語に言い換えたり、和語による簡単な説明を言い添えたりしているものと思われる。今後は和語による美術専門用語もみていく必要がある。

一方カタカナ語は、最初から意味を知らないと、はじめて目にする用語である場合にはそれが何を指すのか確定することは難しい。そのため、実際にはルビや後に続く括弧で意味が説明されるなどの努力がなされているが、いったいどこまでポピュラーになればあるひとつのカタカナ語が注釈なしで単独で用いられるかという判断は非常に難しいものがある。今回調査したなかでも実際に意味が不明なカタカナ語を幾つか目にした。カタカナ語の美術専門用語がどのぐらい知られているか、理解されているか、どのような速度で日本語化するか、その時に様々な要因が存在するのかなどについてはさらに考察する必要があるだろう。

こうして、漢語語彙とカタカナ語彙を行き来しながら、時代が進むにつれて適切な新しい語彙を生産し、より微妙なニュアンスを表現し続けているわけだが、これらの語彙の発生・機能・理解度、類義語との差異、複合語語彙の構造など、つまり突き詰めれば日本語の語彙の在り方というものには、まだ分かっていないところが多い。今後の課題として、様々な角度から日本語の語彙全体の研究を進めることが必要になってくるであろう。

参考文献

CORBIN Danielle (1992) *"Hypothèse sur les frontière de la composition nominale"*, in *Cahier de grammaire*, no.17, Université de Toulouse-Le Mirail.

GROSS Gaston (1996) *Les expressions figées en Français*, Paris, Ophrys.

石野博史 (1983) 現代外来語考、東京、大修館

見坊豪毅 (1964) 複合語、東京、秀英出版

小宮千鶴子 (1995) 専門日本語教育の専門語、日本語教育86号